

お寺って何だろう

——魅力あるお寺について——

小笠原 慶彰

はじめに

おはようございます。私は社会福祉学科の教員で社会福祉原論を担当しています。今まで宗教講座で話に来られた講師のように仏教学が専門でもないし、僧侶でもないし、仏教徒として社会的に活躍しているわけでもありません。ごく普通の社会福祉学科の教員です。なぜそんな私が、ここで話をするのかなと不思議に思う人もあるかわかりません。社会福祉学科の教員である私が宗教講座で話す理由をこれからの話で

わかってもらえたらいいなと思います。

ところで、最初に皆さんに聞いてみたいのですが、学長が宗教講座のはじめに「三帰依文」を読みました。これは何かわかりますか？わからないという人が多いでしょう。なぜ宗教講座で三帰依文を読むのでしょうか。「人身じんじん受け難し、今すでに受く。仏法聞き難し、今すでに聞く」から始まります。「人身」は野菜のニンジンではありませんよ。人身受け難し、仏法聞き難し、よくわからない言葉です。なぜこれを宗教講座のはじめに読むのでしょうか。

なぜ最初にこんなことを話すのかと言うと「今の仏教は、私たちの日常生活に本当に密着しているのか」ということから考えたいからです。実は私たちは日常生活で仏教の、考え方、仏教用語、作法を意識せずに使っていることは多いのです。たとえば「他力本願」という用語は、真宗では中心的な考え方です。しかし、日常的には違った意味で使われることが多いです。仏教用語としては、「他力」は、他人の力、人間の力ではありません。「阿弥陀仏」の力です。でも日常的には他人の力という使い方をします。つまり仏教用語としての意味、本来の意味はわからなくても、日常語とし

お寺って何だろう

て使っているわけです。そういうことはよくあります。これと同じように「三帰依文」の意味はわからなくても、仏教儀式では読むのです。仏教上の意味はわからなくても、いつも読むことになっていくから読むのです。あるいは私たちはお葬式に行ったら、数珠を手にはめて焼香をしますが、なぜそうしないといけないのでしょうか。だれもが皆やっているからですか。仏教的には、意味がありますが、どんな意味があるのか深く考えません。

つまり「仏教が今、私たちの生活の中で生きた教え、生きた仏教になっているか？」ということ。仏教用語の意味も考えずに間違っ使用。仏教の作法をただ決められた形式だから、それを墨守する。どうしてそうするか意味は考えない。本当にそれでいいのでしょうか。そういうことから話を始めていきます。

では仏教が私たちの生活の中で「生きている」とは、どういうことでしょうか。それは「ああ、仏教と出会って元気になった、説教を聞いて生きていく気になった」、そういうことではないでしょうか。そうでなければ、死んだ仏教ではないでしょうか。ところで「生きた仏教」とは具体的には、どのようなものでしょうか。私も正解がわか

っているわけではありません。ひよっとしたら、こういうものが生きた仏教ではないかということをお話したいと思っています。

お寺の役割とは何だったのか——時代に生きる仏教について

まずことの順序として、日本に仏教が伝わってきた頃の仏教は、どうだったのか、考えてみましょう。私は、仏教学者でも仏教史研究者でもないですから、専門的には正しくない、おかしいと言われるかもしれませんが、私が考える仏教の歩みと申させていただきます。

君たちは寺というと、どういう寺を思い浮かべるでしょうか。京都には多くの寺があります。たとえば清水寺、有名なお寺です。あるいは京都光華女子大学に関係の深い寺は、東本願寺、真宗大谷派（お東）の本山です。浄土真宗本願寺派（お西）の本山、西本願寺もある。他にも数え切れません。もちろん京都だけではないですから、日本中となると一体いくつの寺があるのでしょうか？正確に数えた人はいないと思います

お寺って何だろう

ますが、大小取り混ぜておおよそ八万と言われています。八万の寺があるということ、少なくとも八万人の僧侶がいるわけです。一寺に一人ではないですから、もっと多く僧侶がいます。二十二万人と言われています。とにかく八万の寺があり、数十万人の僧侶がいるのです。

千四百年、千五百年前に日本に仏教が伝わった頃にできた寺も、まだ残っています。もちろん、当時のままではありません。何度も焼けたり、壊されたりして、建て直されていますけれども。その中でも古い寺としては大阪に四天王寺があります。聖徳太子の建立と言われています。大阪市の南、JR天王寺駅から歩いて十分くらいのところ。四天王寺は、当初「四箇院」という制度だったと言われています。悲田院、療病院、施薬院、敬田院です。今の言葉では、社会福祉施設、病院、薬局、学校です。創建当時の四天王寺は、もちろん仏教寺院なのですが、そこは現在の言葉では社会福祉施設であり、病院であり、薬局であり、学校だったわけです。当時は寺と言えば葬式ではなかった、むしろ葬式はしていなかったのです。千四百年前に建てられた四天王寺は、どうしてそういう寺だったのでしょうか。その頃の日本とは、まだ普通の人

私たちは、竪穴式住居に住んでいる時代です。竪穴式住居というと、縄文や弥生時代と
思いかもしれませんが、飛鳥や奈良時代でも普通の人は竪穴式住居に住んでいたよう
です。そういう時代に最も新しい文化（建築・医療・学問等）をもたらしたのが寺だ
ったからなのではないでしょうか。

少し下って、奈良時代の寺で君たちが思い浮かべるのは東大寺（金光明四天王護国
之寺）でしょうか。大仏さんの寺です。東大寺は、今でも凄い寺です。木造建築物
としては世界最大級の
大仏殿、その中に鎮座しておられる盧遮那仏、いわゆる大仏で
す。大仏は、実は何回も焼け溶けて、作り直されています。奈良時代に作られた当時
の姿のままではありませんが、あの大仏を奈良時代に作った時、大変な工事だったで
しょう。今でも大仏や大仏殿を作るとなったら大工事に違いありません。あれだけの
建造物、木造建築物ですから。それを千数百年前にどうやって作ったのか。当時最先
端の土木・建築、建造技術が使われたわけです。最新技術が大仏や寺を作るのに使わ
れたわけです。

ここで東大寺を作る時の話として、西山厚『仏教発見！』に書かれていることを紹

お寺って何だろう

介します。時の聖武天皇が発した大仏建立の詔に「人有て、一枝の草、一把りの土を
持ちて、像を助け造らむと情に願はば、恣に聴せ」とあるそうです。これは誰でも一
本の枝、一握りの土を持つてきて、自分も大仏造立を手伝いたいと言ってきたら、そ
れを許してあげなさいということ。そんなものがどんな役に立つのか、ほとんど役に
立たないかもしれない。しかし、この大仏は皆で作っていくことに意味がある。そう
いうことだそうです。西山さんはそこで終わっているのですが、「皆で作っていく」
という意味について、私はさらに思うことがあります。当時の中国から伝わってきた
仏教は、ただ經典にある仏の教えだけではなく、もっと広い教え、つまり土木・建築
の技術、医療や慈悲、それは今の社会福祉の原点といえますが、そういった高度な文
化を私たちに伝えてくれた。それを求めていたのが奈良時代の人たちであった。逆に
言うと、その時代の人たちにとって仏教とは、自分たちが幸せで安心して暮らしてい
ける社会を作るための教えであったのではないのでしょうか。仏教を具現化した土木・
建築、医療、薬、社会福祉の知識や技術をもたらず、日常生活に役立つ重要なもの、
私たちの生活に欠かせないものという認識があったらどうと思っただろうと
思っています。

音楽でもそうです。奈良時代の音楽といえは、仏教儀式で奏でられる雅楽でしょう。雅楽は現代ミュージックと関係ないように思いますが、この雅楽を現代に蘇らせている人がいます。東儀秀樹という人です。知っていますか？たとえばひらりき箏びんという雅楽で使う竹で作った笛を使って、現代の音楽を演奏します。なかなかイケメンですが（笑）、CDもたくさん出していて、いろいろ音楽賞も受賞している人です。東儀さんは、雅楽を現代風に蘇らせて私たちに感動を与えようとしています。東儀さん、もともと雅楽はそういうものであり、ただ宮廷や仏教儀式に閉じこもって、人知れず演奏されているのではないかと考えているのでしょうか。

つまり、奈良時代の人たちにとっては、東大寺や四天王寺は、自分たちの生活に有益で必要なニーズに答えてくれる寺だったと思います。その後に来るのが平安時代です。平安時代は、現代のバブル時代のようにセレブ（貴族）が豊かな暮らしをして貴族文化を形成していきました。しかし、平安末期に末法思想が出てきます。現代的に表現すれば「もうすぐ地球は滅びるぞ」という考え方です。今も地球温暖化が言われたり、大地震が起こると言われたりして、私たちは自然環境から仕返しを受けるので

お寺って何だろう

はないかと不安な日々を送っています。平安末期の人たちも同じ気持ちだったのでしよう。末法思想、つまりこの世はもう滅びるという思想が蔓延したわけです。でも次の鎌倉時代になって、少し違った考えが出てきます。滅びると考える人たちに対して「いや、そう悲観しなくてよいじゃないか。この世が滅びると考える前に今、この世をどう生きていくかをもちと考えよう」という人たちが出てくるわけです。

真宗の開祖である親鸞は、その中でも死んだ後の希望さえもないと言われた人たち、支配者によって社会の最下層に位置づけられた人たちに生きる希望を示しました。生き物を殺し、その皮革を使って製品を作ったり、人間の死体処理をしたりする人たち、「お前たちは殺生や死を生業にする悪人だから地獄に行くしかない」と言われた人たちに対してです。生きている間は「お前たちのやっている仕事はロクな仕事やない」と言われ、「死んでも極楽には行けんぞ、地獄に落ちるぞ」と言われた人が、希望を持って生きていくことができますか？ そういう人たちに対して「いや、そうではない。阿弥陀仏を信じれば、あなたたちこそまず救われて、極楽に行けるのだ」と、そう言ったわけです。難しい言い方では「悪人正機」と表現されます。そう言われた人

たちはどれだけ勇気づけられたか。

世界は滅びるといわれた時代です。そのためにお金持ちは布施（寄付）をして、寺を建てた。そういう人は極楽に行けると言われた。しかしお金のない人、生きている時から「お前たちはロクなことをやっていない」、「地獄に行くぞ」と言われている人たちが、希望を持って生きられてこそ本当だと考えて、「いや、あなたたちこそが極楽に行けるのだ」と言ったわけです。当時は誰もが、最初は非常識でおかしいと思っただけでも、よく考えればそうではないかと納得できることを言った人が親鸞だったのです。その結果、親鸞は支配者に都合が悪い存在になり、迫害されたわけです。

奈良時代のように何か土木や建築といった具体的なものではないけれども、精神性、生きていくための力を与えてくれる仏教。それがこの時代に求められていた宗教、鎌倉仏教だったのではないのでしょうか。救われたいと言われていた民衆を救済するためにセレブの文化から脱皮したからこそ、鎌倉仏教が民衆の間に広まって、盛んになったのです。だからこの時代の寺は、大きな寺でもなく、山上の寺でもなく、民衆に身近な、村の小さな庵として作られ始めるのです。

お寺って何だろう

さて、それからの寺はどうなったのでしょうか。江戸時代になると、徳川幕府の支配が日本中に行き届くようになりました。寺も幕府の管理下におかれます。寺の重要な仕事は葬式になっていきます。しかし江戸時代の寺は、それだけではなく、今でいう戸籍係をしていました。子どもが生まれたら寺で登録してもらおう。そういう役割を持っていました。ですから、生まれた時から死ぬまで、ずっと自分の旦那寺の住職とつきあうわけです。人生を一緒に送ってきた人に看取ってもらって亡くなっていくわけですので、葬式の意味も大きいのです。安心して死んでいけるという役割を担っていたのです。その他にも寺子屋、つまり学校の役割もしていました。江戸時代の寺は、奈良時代や鎌倉時代の寺とは違いますが、教育や看取りの役割も持っていたのです。

そういう江戸時代の寺が明治になってどうなるのでしょうか。明治時代の日本は、西洋近代国家をモデルにします。ところがそのために寺が持っていた機能が、国家によって制度化されます。寺子屋は学校になって、寺から教育という機能がなくなってしまう。村人の争いも僧侶が調停していましたが、そんなのは裁判所に行けということになります。寺の役割がだんだんとなくなって、最後に残ったのは何だったのか

しょうか。

それは精神的支柱だったのでしょうか？それも明治以降は国家神道にとって代われ、精神性さえも寺には期待されているのか、いないのかわからない状態になりました。村人は町に出て行って、住職と村の人たちが生まれてから死ぬまで一緒にともに生きていくこともなくなりました。最後に残ったのは、死んだときに葬式に現れて、ただ経をあげるだけ、そういう役割だけになっていきます。それが今、葬式仏教と揶揄されています。村人と寺のつながりはなくなってしまったのです。

これは仏教にとって危機だったのです。その時期、仏教教団は生き残っていくために、まず仏教の教義を確固としたものにしようとします。仏教学です。真宗では清沢滴之や暁烏敏といった高名な学問僧が、ヨーロッパ哲学などを採り入れ、真宗学の教義を確立していこうとしました。それは難しい学問です。私たちが読んで簡単に理解できるものではありません。そういうものを追求し、それによって国家神道に対抗し、生き残っていこうとしたのです。でも実際に生き残っていくためには、学問だけでは不十分で、いろいろな政治的妥協をしていきました。たとえば、明治政府が国家神道

お寺って何だろう

は宗教ではないと言った時に「そんなことはない、神道は宗教だ」と反論しなかったのです。「神道は宗教ではないから」という理由で、僧侶は神道式礼拝をするようになりました。そういう妥協をしたわけです。そうした妥協の積み重ねが、仏教にとつて大きい問題になっていきます。いろいろな妥協をしていった最後の時点で、真宗教団も含めた仏教教団の多くは、戦争することに反対しませんでした。

むしろ、協力すらしめたのです。それはどういうことか。たとえば、戦争協力を正当化するような仏教教義さえあったということです。それが不殺生、仏教の五戒の第一にある不殺生、人を殺してはいけない、人だけではありません、生きているものを無闇に殺してはいけないということを、戒の第一に上げている仏教の教えなのではないでしょうか。仏教が殺し合いの戦争を正当化する教義を唱えるということが許されるのでしょうか。

アジア太平洋戦争後に、仏教教団はそれを反省します。そしてその上に今の仏教教団があるわけです。たとえば、光華女子学園に関係深い真宗大谷派では、一九一〇（明治四十三）年、高木顕明師に対して行った処分の仕方が間違っていたとして、一

九九六年（平成八年）処分を撤回しました。師は、反戦ではなく、非戦論者ですから、戦争なんか絶対しない、協力もしない、戦争があることを認めないという立場をとった真宗大谷派の僧侶でした。師は、大逆事件という明治国家による思想的フレームアップ事件で監獄に入れられた人です。その師を大谷派は処罰したわけです。師の僧侶資格を取りあげ、家族を寺から追い出す措置をしました。本人だけではなく、家族に対しても差別状態においたのです。戦後五十年たって初めて大谷派は誤りを認めました。それを誤りだったと宣言して、師の名誉を回復したわけです。処罰から八十年、戦後五十年、それだけの時間がかかったけれども、しかし誤りだと認めただけです。そこから始まるのではないのでしょうか、これからの時代の仏教や寺の役割というのは、

ところで、今の話との関係で重要だと思ふことがあります。十月二十二日（日）、読売新聞や京都新聞に載った京都光華中学・高等学校の全面広告のことです。光華女子学園の創設に深くかかわった大谷智子という人の紹介が出ています。そこに「時の皇后陛下のお妹様」と書かれています。それは事実ですから否定する必要はありません。ただ、それに対して何の説明もないのです。今、話したように戦前の真宗教団は、

お寺って何だろ

高木顕明師のことに典型的に表れているように国策協力の姿勢でした。それは大谷派に限らず、仏教諸宗・諸派とも同様でした。さらに真宗大谷派も浄土真宗本願寺派も戦前の皇室との結びつきを強めようとした時期もあつたわけです。その反省を今、しているわけです。ところが、それに対する説明が、この新聞広告には書かれていない。ただ事実を表す語句だけが挿入されている。読者はそれをどう捉えるのでしょうか。これはちよつと残念でした。それが今、私たちにとってどういう意味があるのか、光華女子学園の教育にとつてどういう意味があるのか、京都光華女子大学が社会福祉学科を作つたということの意味と、どうつながるのかということ、説明してほしかったと思つています。皆さんはどう思つたでしょうか。

とにかく、そうして戦争協力に走つてしまった仏教教団は、戦後、その反省の上になつてどういふことをやつていこうとしたでしょうか。真宗だけではありません。仏教全体です。教団ではなく、僧侶はどうだったのか、個々の寺はどうだったのか。戦前に少し違つたことをしていた寺の紹介も含めて、次にそういうことについて話したいと思つています。

現代に生きる仏教の先駆け

ところで皆さん、今、寺にどれくらい期待しています？「何かやってくれそうだ」、あるいは「あそこに行ったらええことありそうや」という寺は、どれくらいあるでしょう。寺というと葬式と思っているかもしれません。今や寺の唯一の役割は、葬式と行ってよいでしょう。でもその葬式でさえ、寺でやる葬式でも、葬儀会館でやる葬式でも「ああ、これはいい葬式やった、感動した、涙が出た。ほんとに、故人のことがよくわかった」というお葬式がどれくらいありました？ 今のお葬式、特に葬儀会館でやっているお葬式は葬儀屋さんほとんどを取り仕切ります。僧侶は、ただ経をあげてさっさと帰る。金だけとられる。これでは葬式でさえ、ちゃんとやっていると言えるだろうかということ。誰もが満足できる葬式をやっているのか疑問です。どれだけお布施を払わないといけないのか、それで頭を悩まして、家族で喧嘩しないとイケなくなる。故人を忘れたそんな葬式で良いのでしょうか。寺に残された唯一の役

お寺って何だろう

割である葬式でさえ、そういう体たらくです。一体、寺に何を期待したらいいのかということになります。そんな中で、もっと社会や人の役に立つ寺を作っていこうという、前向きのイメージを持った僧侶はいないのでしょうか。いたらどんな人なのでしょうか。

さてそこで「そんな寺もないし、僧侶もいませんよ」と言ったら、それで終わりです。けれども、いるのです、そういう僧侶が。全国八万の寺の僧侶で、どれだけの僧侶かわからないけれど、います。私の知っているのは、ほんの少しですが、何人か紹介します。まず現在の人ではないですが、資料の「光徳寺善隣館と佐伯祐正」に出てくる佐伯祐正という僧侶です。佐伯師は、浄土真宗本願寺派、いわゆるお西の寺である光徳寺の住職でした。光徳寺は、大阪の中津にあります。京都から行くと十三と梅田の間ですが、京都線には中津という駅はありません。神戸線か宝塚線にあるのですが、これが駅かという程度の見過ごししまいそうな駅です。そのすぐ北側にあります。光徳寺善隣館というのは、その寺が戦前に行っていたセトルメントです。今から七十、八十年前、明治の終わりから大正、昭和の初め頃のことです。

当時、中津はまだまだ農村でした。その頃の大阪は、今で言うキタ（梅田周辺）、ミナミ（難波周辺）が中心で、大きくなるにつれてその周辺にいろいろな工場ができました。マッチ工場、綿糸紡績工場等です。東洋のマンチエスター（イギリスの工業都市）と言われていました。その頃、小作の農家はとても貧しかったために、農村から大阪に働きに来る人たちがたくさんいました。紡績工場で働く人は、大竹しのぶさんの主演で映画にもなった『あゝ野麦峠』（東宝、一九七九）に出てくるような、いわゆる製糸工女たちです。もっともあれは信州の絹糸紡績工場の話ですが。それにマッチ工場では児童労働が行われていました。

今でも東南アジアやアフリカ、南米等では家族が食べていくために自分たちも働かざるをえない子ども、幼児売春したりする子どもがいます。それと同じように明治・大正期には日本でもマッチ工場で、子どもが働いていたのです。今の小学生や中学生にあたる子どもがマッチの箱詰めをやっていました。つまり児童労働でした。そういう子どもたちと家族が大阪中心部とやや周辺部で、家賃の安い家や宿屋を探して住むのです。そして次第にそういう人たちが集まって住むようになっていきます。

お寺って何だろう

今でいうスラムです。現在でも日雇い労働や不安定就労の人たちが多く集まって生活している「釜ヶ崎（あいりん地区）」が大阪市西成区にありますが、同じようなところが大阪の町に何ヶ所もあったのです。中津附近もその一つで、都市周辺の農村が都市に吸収されていくころのことです。

その時に佐伯祐正は工女さんや、児童労働にかり出されている子どもたちの状況を見て「その真只中にある寺が、ただ可哀相やな、でほっとくのか。何もせんでも良いのか。親鸞聖人の教えは、可哀相ですね、死んだらあの人たちも極楽に行けますよと、それだけだったのだろうか。そうじゃないだろう。あの子たち、あの人たちに何かをしないといかん。それこそが仏教であり、寺や」と思ったわけです。でも何をやれば良いのかわからなかったのです。今、日本で一番長いことで有名な天神橋筋商店街のほぼ北端の天六（天神橋筋六丁目）で、その頃に大阪市立北市民館というセツルメントがありました。志賀志那人という人が館長をしていました。

北市民館で志賀志那人が何をやっていたか。子どもたちに字を教える夜間の小学校をやったり、お母さんたちに手に職をつけてもらうためにミシン教室をやったりして

いました。それから料理教室等もしていました。お金もないし、料理の仕方を知らないから、家族や子どもにロクなものを食べさせられないわけです。それではだめだということ、安い食材で栄養のあるものを食べさせて、家族が病気になる、子どもたちがちゃんと育つようにしようとしたわけです。現にたくさんの子どもたちが成長する前に死んでいってしまう状況だったのですから。あるいは大人も病気になる、怪我をしたりしても医者にかかれない。お金がないから病院にもいけないのです。それで怪我をしたら治療でき、病気になるたら薬をもらえる、そういう機能を持ったセツルメントを作ったのです。その天六と中津は近くです。佐伯祐正は、市民館を見て、「あれや」と思ったわけです。「あれをやったらいいのや、自分の寺でやったらいいのや」ということで、北市民館で五年間、志賀志那人に教えてもらいました。

さらにそれだけでなく、ヨーロッパまで行ってきました。セツルメントの始まりはイギリスです。世界最初のセツルメントであるトインビーホールに行つて、何か月もそこで泊り込んで研修したのです。アメリカにも行つて、シカゴのハルハウスというセツルメントも見てきました。光徳寺でどんなセツルメントをしたらいいかと考えて、

お寺って何だろう

そして始めたわけです。もちろん光徳寺は、寺です。寺でそんなことをしているとこ
ろは、今でもほとんどありません。それを、大正から昭和のはじめにかけて、してい
たのです。

何をやったか。紡績工場で働いている少女たちに料理の仕方や裁縫の仕方を教える
のです。紡績工場で働いていたら裁縫はわかりそうなものですが、あれは糸を作つて
いるのです。でも、その糸でできた布をどう切ったりはったりしたら服になるのか知
らないので、それを教えるのです。技術を身につけたら自立していけると、そういう
ことを考えたのです。あるいは子どもたちが学校に行けないので、字もわからない。
わからないまま大人になったら困るので、字を教えます。でも工場を休ませて来させ
ると家族が困りますから、夜に子どもたちを来させて字を教えるのです。お父さんが
亡くなって家族が住むところに困ったら、今は母子生活支援施設があります。当時は
そんなものはありませんから、その先駆けを寺の中でやります。母子を引き取って生
活をさせる母子寮です。その上、なんと、よほどの金持ちしか持っていなかった自動
車を手に入れて、郊外にカントリーハウス（別荘）を作り、身体の調子の悪くなった

人や子どもを車に乗せて連れて行って、そこで休養させます。とにかくいろいろなことを寺の活動としてやったわけです。寺の周りの地域で起こっている問題は何か。貧困な人たち、児童労働で苦しんでいる子どもたち、将来が見えず仕事で身体が蝕まれている女の子たちに、今、寺ができることは何かと考えてセツルメントを始めたのです。それから四半世紀続きました。

でも一九四五（昭和二十）年三月の大阪大空襲で、光徳寺も善隣館も焼けてしまいました。戦争をした結果、焼けてしまったのです。そして佐伯祐正自身も空襲で怪我をして死んでしまいました。彼は自分も寺の住職として、仏教者として戦争反対と言わなかったことを後悔していたかもしれません。彼が精魂込めたセツルメントも寺も焼けて、自分も死んでしまったのですから。でも彼のやったことは、先駆けです。そういうことをやった人がいたことは事実なのです。では今はどうなのでしょう。同じようなことをやっている人はいないのでしょいか。そんなことはありません。

現代に生きる仏教のいろいろ―魅力あるお寺と僧侶たち

「これは現代に生きている仏教だ」と思うもののいろいろあります。魅力ある寺や僧侶たちもいます。『がんばれ仏教！お寺ルネサンスの時代』にいろいろ紹介されていますので、まずそれを話します。

始めに長野の浅間温泉にある神宮寺とその住職の高橋卓志という人です。神宮寺は残念ながら私は行ったことがないのです。でも行ってみたい寺です。ここではどんなことをしているのでしょうか。皆さんは、たいしたことないと思うかもしれないけど、この寺は住職の給料がわかっているのです。住職は、年収七五〇万円、月給五十万円、事務長、三九九万円、事務スタッフ三〇一万円、スタッフ二六七万円。住職夫人が一三七万円。副住職一一〇万円と公開されている。この本に書いてあります。皆さん、住職が寺から給料を受け取るということ自体、わかりますか。住職は寺から給料を受け取る存在だと知っていますか。まして給料を公開している寺は、ほとんどありません。

お寺って何だろう

ん。なんでこんなことをするのでしょいか、高橋さんは。

神宮寺では、お葬式にかかる費用も全部わかっていきます。お葬式したら、どれだけお金を出したらいいのかわからない、どう使われるかわからない。でも経理が不透明なそんな葬式が良い葬式なのでしょうか。「住職はなんぼ、もろうてるのやろ。お布施ばかり取って行って、何に使うてんのやろ」といった気持ちでは、お布施も出したくないでしょう。高橋さんは給料七五〇万円で、それは自分の生活のために使うのです。でも神宮寺の収入は、僧侶に給料を払う以上にあります。その中で住職の給料はこれだけなのです。あとは寺の活動のために使っています。それも全部公開されています。どういうことをやっているのかというと、わざわざチェルノヴィリに出掛けて行ったりします。何故チェルノヴィリかというと、そこで放射能を浴びて病気になっている子どもたちを助けるためです。でもそれは自分の給料を使って行っているのではないのです。寺の金で出張しているのです。なんでそんなことをするのかというと、原子力の問題が私たちの平和な生活を脅かす現代の大きい問題だからです。日本だけ、まして浅間温泉の神宮寺の周りのだけが平和ならよいという話ではないからです。も

お寺って何だろう

ちろん核戦争が起こったら地球は終わりですし、放射能がどこから漏れたら、世界中に影響のあることです。私たちが毎日、危機にさらされている問題です。「それに対応するというのは、平和を求める仏教者として当然やるべきこと」という考えなのです。住職の給料をはじめとして、寺の経費になるお布施を出している檀家もそれに共感しているのです。

神宮寺では、葬式も葬儀業者任せとは違います。「旅立ちデザインノート」というのがあります。自分が死んでいく時、どんな葬式をしてほしいか、自分で書いておくのです。どうしてそういうことをするのでしょうか。自分が死んだら、どんな葬式をしてくれるか。若い人はそんなこと思わないかもしれないけれど、少し歳を取ると、気になります。死んだ後、どんな葬式をしてくれるのか。「行かなあかんかな、しゃあないからつきあいで行こか、焼香も長いこと並びたないな、香典とられてアホらしかった、と思う奴は来ていらんな」と思っている、死んだ後はわかりません。高橋さんは「どんな葬式をしてほしいか、自分で決めておきなさい。そのとおりにやります」ということです。住職や葬儀業者が、こうしろああしろというのではない、本人

の生前の希望通りやるのです。その希望を作っていくノートなのです。そんな面白いことをしている人です。葬式だけではなく、私たちが今、寺に対して「こんなことをやってほしいな」ということ、また高橋さん自身が「寺がやらないといかんことや」と思うことを、どんどんやっていくわけです。

それから次に應典院の秋田光彦さん。配布したチラシは、十月三十一日に應典院で行われるプログラムです。「大阪発：お寺の〈実力〉―社会参加仏教と現代―」となっています。この企画は「お寺の実力」ですから、まだわかりませんが、普段のこの寺で開催されるプログラムは「なんでこんなのを寺でやるの？」というようなことばかりです。たとえばどこで寺や仏教に繋がるのかよくわからないような演劇の上演や映画の上映会、いろいろな講演会をやっています。このチラシの下の方を見ると主催は應典院寺町倶楽部となっていますが、後援に大阪市社会福祉協議会が入っています。社会福祉協議会、つまり地域福祉の推進機関が応援しています。どうしてかということ、「お寺の実力」は、地域福祉と無関係ではないのです。寺がどんな機能を持っているかによっては、その地域で生活している人にとって重要なものになります。その可能

お寺って何だろう

性があるから社会福祉協議会が後援しているのです。應典院の秋田さんは「お坊さんは自分の住んでいる地域がどんなふうであれば良いのか、この地域の人たちの生活をどうしていくか、そのためにお寺がどうあらねばならないか」を考えて、必要なことは何でもやる僧侶です。つまり「町をキャンパスにした絵描きさん」と思っているわけです。実は、應典院は葬式をやらない、その代わりに地域を生かす活動をしていく妙な寺なのです。

その次に紹介してあるのは、福聚寺の玄有宗久さん。この人は芥川賞をとった作家です。面白い小説を書きます。寺のこととか、住職のこととか出てきますが、それを読んで寺や僧侶の問題は、現代の課題だと思えます。そういう小説も面白いのですが、私が面白いと思う本は、小説ではありません。仏教は、ちょっとうさん臭い、科学から見ると「そんなことほんまにあるのか」ということ、たとえば地獄とか極楽とか誰も行ったことがない、証明できない。そんなこと言われても」ということがあります。だけど玄有宗久さんは、今の最先端科学で仏教の考え方を、どこまで説明できるかという本を書いています。「死んだらどうなるの？」という本です。そんなこと誰もわ

からないです。僧侶はわかったように言いますが、本当はわかってないです。

では、この本にどんなことが出てくるのかでしょうか。たとえば四十九日です。死んだ後、七日ごとに七回経をあげていく。四十九日が満中陰です。四十九日が経つたらあの世に着いたということです。あの世というのは西方十万億土の距離にあると経に出てくる。ある人が、十万億土の距離に四九日間で行くとしたらどんな速さなのかを計算した。それが朝日新聞の「天声人語」に載っていた、とこの本に出てきますが、なんと秒速三十万キロです。何の速さでしょうか。一秒間に地球七周半。光の速さです。光速で四十九日突き進んだら、あの世に行く。「科学的に説明すると、そうなる」とこの本に出てきます。たまたまた偶然の一致なのでしょう。十萬億土の彼方にあの世があつて、光速で四九日目に到達すると言われると「へえ」と思いますけど、どうですか。それから死んだら軽くなるという話も出てきます。人が死んだら二十一グラム軽くなるという話をもとにした映画『21グラム』（アメリカ・二〇〇三年）がありました。見た人いますか？もつとも『魂の重さの量り方』という本もありますけれども。とにかく、人間が死んだら二十一グラム軽くなる。それが魂の重さだというの

お寺って何だろう

です。そのエネルギーを計算してみたら、富士山を十八センチ持ち上げるエネルギーになるということです。それだけあつたら光速で四九日も可能でしょうね。どうです、科学的でないですか。人間の魂に重さがあるとしたら、そのエネルギーで富士山を十八センチ持ち上げられる。そのエネルギーで人間は死んだら、光になって四九日、秒速三十万キロで十億土の彼方に行くのかもしれない。そんなことが玄有宗久さんの本に出てくるのです。

ただ、それでもなお説明しきれないものが残る。たとえばどうしてあの世に行くのかということですね。あの世が浄土だということは、それはもう仏教の信仰でしかないわけです。そういうことがこの本に出てくる。わけのわからない非科学的なことを一方的に信じさせる仏教の話じゃないのです、玄有宗久さんの本は。科学で説明できることを、トコトン説明して「それでもなお残ることは一体何か」ということが書いてあります。「なるほど、仏教の考え方は今の科学でも相当説明できるのだなと思えます。なかなか面白いな」と、ちょっと興味が湧きます。今までの三人の話は、「がんばれ仏教!」という本に出てきます。また読んでみてください。

最後にもう一人、随興寺というお寺の清史彦さんの話をします。さっきの應典院のチラシに出ている催しには、ピハラー活動の実践者としてゲストで出ています。ピハラーというのは、ホスピスの仏教的な表現、つまり終末期ケアです。一方この人は「Vows Bar（坊主バー）」(<http://www.geocities.co.jp/Milkyway-Orion/5766/>)もやっている人です。随興寺は真宗大谷派、つまり「お東さん」の地域寺院です。光華女子学園と縁が深いです。大阪市の平野区にあります。清史彦さんは、その住職でもあるのです。ところが、この人が大阪のミナミ、心斎橋で坊主バーをやっているのです。バー、つまり、酒場です。なんとそれが東京でも四谷と中野にあって、合計三軒にもなっています。坊主バー、坊さんがやっているバーです。開店した頃、評判になりました。

寺の住職が、なんでこんなことやるのでしょうか。清さんは、寺で待っていても駄目だと考えたのです。会社で部下と諍いがあつて、帰りに「ちよつとしんどいな、ちよつともやもやしている。家に帰って嫁さんと言ひ合うのも嫌や」。そういうことを思う中年のおっちゃんがあります。あるいは君たちでも、友だちと喧嘩して「寂しいな、

お寺って何だろう

誰にも言えへんし、どっかええとこないかな」と思う時ありませんか。その時に「お寺に行つて、誰か来てたらちよつとしゃべつて、さっぱりして帰ろ」と寺に行く人はまずいません。そんな状態なのに僧侶が寺で待っていたらあかん。待つてないで、誰でもすぐ寄つて来てくれるようなものが何かできないかと考えたのです。それが飲み屋、バーだったのです。それで坊主バーをやつたら、たくさんそういう人が来たのです。だから大阪だけでなく、東京に二軒増えて三軒もある。今流行の言葉で言えば、「癒しの場（バー）」です。こんなことをやっている僧侶もいるわけです。

私たちが育てる魅力あるお寺と僧侶

いろいろな面白い寺や僧侶を紹介してきました。今、私たちが生きている現代社会には、いろいろしんどいことがあります。ほんとにいろいろなことです。君たちに身近な問題としては、いじめとか、友人関係で悩むとか。経済的なことでは、格差もあります。皆さんの中にもセレブな人もいればアルバイトしなくては授業料を払えないと

いう学生もいます。環境問題では、アトピーとかハウスダストとか喘息で苦しんでいるということもあるでしょう。おじいちゃん、おばあちゃんがいたら終末期ケア等も同じく癌やいろいろな病気でしんどい、痛い、死にたいと言っている人。戦争、貧困、差別、孤独、不安、公害、安楽死、臓器移植、エイズ、難病、不妊、児童虐待、不登校、セクハラ、パワハラ、それに事故。つい先日でもJRの事故で亡くなった恋人がどの車両に乗っていたかわかるまで生きていたと言っていたけれど、その力をなくして自死した人がいました。そんな人に対して私たちは何ができるのでしょうか。天災もいろいろ起こります。地震、台風、津波、噴火。いろいろな生活を不安にさせる問題があります。そんな悩みを抱えたり不安に直面したら、あるいは抱えたり、直面した人に出会ったら、自分には何ができるか。私たちは本当に無力ですが、その無力さを自覚した時、どうしたらよいのでしょうか。僧侶ならなおさら葬式だけやってほしいという話ではないはずです。そんな悩める人、無力を痛感する人たちに対して、一体僧侶や寺に何ができるか。僧侶は何をしたらいいか。寺はどう応えていったらいいか。あれやこれや課題は一杯あります。

お寺って何だろう

最近読んだ本からもう一つ紹介したいと思います。南木佳士「急な青空」に、あるおばあさんの作った歌が出ています。「あらがえぬ命なりけり、死者の顔、撫でしこの手で夜半に飯はむ」という歌です。このおばあさんは愛しい人を亡くしたのです。そんな日でもお腹はすいてしまうのです、生きていたら。昼には愛しい死者の顔を撫でたその手で、夜にはご飯を食べているという歌なのです。「アアツ」と思わないですか？すごい歌やと思いませんか。なんかそんなことしたくないですよ。でも生きている限り、お腹はすくのです。「死んでいった人の顔を撫でた手でご飯を食べな、しゃあない。ああ、なんと哀しいことかいな」と思うけれど、生きていくためには、それは必要なことです。そういう歌を歌っているわけです。

私たちは生きていく上では、そういう苦悩はたくさんあります。その苦悩とどう向きあっていたらいいのか。どう解決していったらいいのか。それに寄り添ってくれるのが、宗教、寺、僧侶でなくて、何なのでしょうか。そういう苦悩に寄り添うのが、僧侶であり、寺であり、宗教ではないですか。でもそういう僧侶も少ない、寺も少ない。全国には八万の寺がある。だからすべての寺が私たちの苦悩に寄り添ってくれた

ら、どんなにすばらしいでしょう。

親鸞が言うように、阿弥陀仏を信じれば、誰もが死んだら極楽往生できるのです。けれども、生きている間には苦しいことが一杯あります。その苦しいことを一体どうやって乗り越えていくのか。どうやったら苦しみをともに分かち合えるのか。私たち社会福祉学科の教員は、寺だけでなくて、寺を含んだ地域社会、あるいは働いている職場も全部含めて、そういう苦しみを誰もが共有できる社会をどうしたら作れるかを考えています。寺は地域の中にあります。ですから寺を拠点に地域社会を変えていくこともできるでしょう。そうして、どうしたら他人と共生できる生活の場をつくっていくのか、それを考えているのです。少しでも地域を生きやすく変えるような元気のある寺が出てきてほしい。八万の寺が皆そうになったら、すごいでしょう。日本は変わるでしょう。それに期待しています。全国の八万の寺がどれだけ元気な寺になるか。その元気な寺を作っていくのは実は私たちです。私たちが寺や僧侶に、どれだけ期待するか。その期待に寺や僧侶は、きつと応えるでしょう。そういうことを言いたかったのです。それではこれで終わります。ありがとうございました。

お寺って何だろう

【参考文献】

- ① 西山厚「仏教発見！」講談社現代新書、二〇〇四。
- ② 小笠原慶彰「光徳寺善隣館と佐伯祐正―まちを歩けば（第十四回）」
『市民活動総合情報誌V o l 1 0』第四十一巻一号（通巻四一二号）、二〇〇六。
- ③ 山本茂実「あゝ野麦峠―ある製糸女工哀史―」角川文庫、一九七七。
- ④ 上田紀行「がんばれ仏教！お寺ルネサンスの時代」NHKブックス、二〇〇四。
- ⑤ 玄有宗久「死んだらどうなるの？」ちくまプリマー新書、二〇〇五。
- ⑥ レン・フィッシャー（林一訳）『魂の重さの量り方』新潮社、二〇〇六。
- ⑦ 南木佳士『急な青空』文春文庫、二〇〇六。
- ⑧ 河合準雄・中沢新一『仏教が好き！』朝日新聞社、二〇〇三。
- ⑨ 阿満利磨『社会をつくる仏教―エンゲイジド・ブディズム』人文書院、二〇〇三。

——二〇〇六年一〇月二五日——